京都大学全学共通少人数セミナー　平成２１年度前期

科目名：創造性とは何か？
担当教員名：　村瀬　雅俊
場所：　基礎物理学研究所
日時：毎週火曜日　第５時限
E-mail: murase@yukawa.kyoto-u.ac.jp
Tel: 075-753-7013:　Fax: 075-753-7010

第１３回

こころの老化としての「分裂病」－創造性と破壊性の起源と進化－＊１（その４）

６　マンダラ　－生命シンボルとしての「自己・非自己循環原理」－

２０００年１２月１９日、私は、細胞の分裂パターンをひたすら紙に描き続けていた。「外」での対立が「内」での対立となる過程を、何とかして捉えようとしていたのである。その時に描いていたものが図５である。中心に位置する「円」は、始原状態にある細胞を示している。細胞は、それ自体で「内」と「外」の対立があるために分裂し、「対立」した二者の細胞となる。それらを「統合」するためには、どのように表現したらよいのか。この「外」なる対立を、「内」なる対立として取り込んだことによって可能となる新たな統合を四角形で表示する。すると、「内」なる「対立的共存」を表現することができる。この新たな単位は、再び「対立」した二者へと分裂する。その「外」での対立を、さらに「内」なる対立として統合する。このようにして、この図は、右巻きらせんを描きながら、大きな「円」の中におさまる形で落ち着いた。この大きな「円」は最終状態を示すと同時に、始原状態の「円」と同形であるために、ここから次の発展過程へと進む。このように、この発展過程は、とどまることなく続いていく。ここに、自ら生み出したものを飲み込むウロボロスのイメージが隠されている（３２）。そして、大きな「円」の外側は、「生命」の「外」なる宇宙を表現している。この図には、どこにおいても「内」があり、「外」がある。そして、それらがまた「全体」でもある。この図をひたすら描きながら、私は、自分自身のこころが静かに落ち着いていく過程を体験した。そして、描き終えた時、こうした図こそ、ユングの言うマンダラではないかと思い当たったのである（３３）。マンダラとは、サンスクリット語で「閉じた円」を意味する。あるラマ僧が語ったところによると、

マンダラとは、内的な像で、心の平衡が失われている時や、ある思想がどうしても浮かばず、自らそれを探し出さねばならない場合等に、創造力によって徐々に心の内に形作られるものなのである（３４）。すなわち、マンダラは混乱した精神状態を癒す古来からの妙薬であったと言える。

ここで、図５の全体を四角で囲んである意図について、述べておきたいと思う。実は、この「四角」には完全性を示すという意味がある。この図がマンダラであることに気づいた後に、完全性を示す意図から付け加え、この段階で図としての完成を見た。生命の構成分子種は、核酸やタンパク質といった線状分子の他、「閉じた構造」をとることのできる脂質、分岐した構造を作ることができる糖質が、主要な「四」分子種である。しかも、それぞれの分子は、構造・機能・情報・エネルギーという「四」形態を取ることが出来る。また、核酸には、アデニン、グアニン、チミン、シトシンという「四」つの塩基がある。このように、「四」という数字は、マンダラや錬金術（３３）に見られる完全性を示すとされる「四」方向、「四」分割、あるいは「四」元素との対比されるように、特別な意味がある。

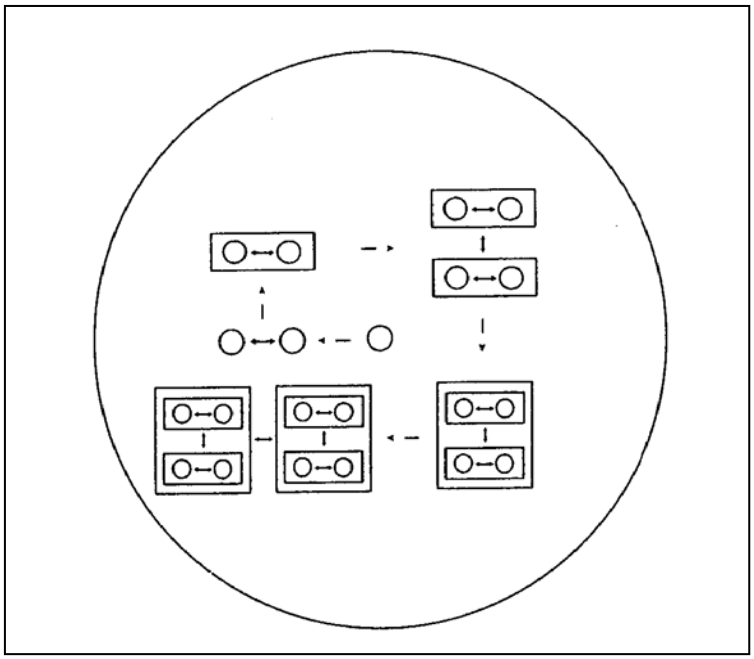

図５：マンダラとしての「自己・非自己循環原理」

重要な点は、図１～５が全て同形であるという事実である。図１は、「認識」の発展過程を示している。実は、図５の分裂した二者のうちの一者のみを入れ子的に描いていくと、図１が出来上がるのである。また、図２は、「進化」に伴う多様性の逆相関関係を示しているが、「外」なる多様性を「内」に取り込む過程として見ると、図５と同形になる。さ

らに、図３と図４は、細胞という「生命」の存在を示しているが、これらの図は、図５の部分であると同時に、全体とも言えるのである。このことから、西田幾多郎の《在ることは、働くことで、知ることである》という主張ーすなわち、「生命、進化、認識の同形性」ーは、マンダラとして表現可能であると結論づけられる。このマンダラは、「存在の側面、発展の側面、認識の側面」という三者を兼ね備えた「生命シンボル」と言える。この「生命シンボル」は、「創造性のシンボル」であると同時に、「破壊性のシンボル」である。何故なら、生命のあらゆる「階層内の対立」の間で、また、あらゆる「階層間の対立」の間で、「分裂」が起こり得るからである。

以上の考察を終えて、再び図５を眺めてみると、「外」での客体間の対立は、「内」での主体内の対立と同形であると同時に、「内」と「外」との主客間の対立とも同形であることがわかる。こころとは、「内」と「外」の適応過程に他ならない。従って、この同形性がある故に、《「外」のマクロの世界で起こることは、「内」のミクロの世界でも起こり、さらには、「内」と「外」をつなぐこころの世界でも起こる》という一般法則が成立するのである。従って、「分裂病」はマンダラの「解体」、あるいはマンダラの「統合障害」として理解可能なのである。逆に、「分裂病」者がマンダラを自律的に構成できる時、「分裂病」は治癒するのかもしれない。

最後に、「進化」に関する従来の諸理論との明確な相違について述べておきたいと思う。従来の理論は、いずれも、自己という「内」における自己増殖（３５）、自己創出（３６）、自己多様化（３７）、あるいは、自己組織化（３８）を考えるにとどまっている。しかし、私が主張する「自己・非自己循環理論」の場合は、「外」にある非自己を自己の「内」に取り込むという「統合」と、それに伴う「解体」の危険を常に孕みながら展開していくことが理論の本質である。言い換えれば、「外」の世界を閉め出す自己形成ではなく、「外」の世界を「内」に包み込む自他形成の理論とも言えるのである。

小論を書き終えて、あらためて実感することは、《混沌とした社会に生きる私達が、今、必要なのは、自分のこころにある人間性の基盤を、その創造性と破壊性の両面性として捉える「自己知」ではないだろうか》ということである。そして、学問も生命も同形のマンダラであるならば、この小論が、一つの論考の終わりであるとともに、新たな展開へ向けた始まりでなければならないと思う。

謝辞：２０００年１２月７，８日に、京都大学総合博物館において開催した研究会、『人間とは何かー創造性と破壊性の起源に迫るー』にご参加頂いた全ての方々に感謝したい。その成果を、このような形で発表する機会を与えて下さった木村敏先生、中村雄二郎先生にも深く感謝申し上げたい。また、日々の議論と原稿のタイプ打ちをしてくれた妻、智子に感謝したい。

文献

（１）Ｃ．Ｇ．ユング（１９３６）「元型－とくにアニマ概念をめぐって」『元型論』林道義訳、紀伊國屋書店、１９９９年、７７－９８頁

（２）Ｋ．ローレンツ（１９５４）「心理学と系統発生学」『動物行動学Ⅱ』丘直道・日高敏隆訳、思索社、１９８９年、２３７－３０１頁（本書は現在、筑摩書房　ちくま学芸文庫として刊行）

（３）村瀬雅俊『歴史としての生命－自己・非自己循環理論の構築－』京都大学学術出版会、２０００年

（４）木村敏『心の病理を考える』（岩波新書）１９９４年；木村敏『偶然性の精神病理』（岩波書店）、２０００年；Ｉ．Ｉ．ゴッテスマン（１９９１）『分裂病の　起源』内沼幸雄・南光進一郎訳、日本評論社、１９９２年

（５）朝永振一郎（１９６１）『科学者の自由な楽園』江沢洋編、岩波文庫、２０００年、９７～９８頁

（６）湯川秀樹（１９４３）「物質と精神」『目に見えないもの』１９７６年

（７）『バラモン教典　原始仏教』長尾雅人・服部正明訳、世界の名著、中央公論社、１９６９年、１２９頁

（８）Ｃ．Ｇ．ユング、W．パウリ（１９５５）『自然現象と心の構造』河合隼雄・村上陽一郎訳、海鳴社、１９７６年、１６３－１６４頁

（９）Murase, M. (1996): Alzheimer's Disease as Subcellular 'Cancer' －The Scale-Invariant Principles Underlying the Mechanisms of Aging －. Progress of Theoretical Physics 95; 1-36.

（１０）Murase, M. (1992): The Dynamics of Cellular Motility. John Wiley&Sons.

（１１）Ｊ．ピアジェ、Ｒ．ガルシア（１９８３）『精神発生と科学史－知の形成と科学史の比較研究』藤野邦夫・松原望訳、新評論、１９９６年

（１２）A. オリフ、J. B. ギブス、F. マコーミック「分子レベルでのガン治療」　日経サイエンス、１９９６年、１２月号、１５２－１５９頁

（１３）Ｊ．ピアジェ（１９５２）『知能の心理学』波多野完治・滝沢武久訳、みすず書房、１９６０年、２７４頁

（１４）Ｋ．ローレンツ（１９７３）『鏡の背面　上巻』谷口茂訳、思索社、１９７４年

（１５）例えば、西村三郎（１９８３）『動物の起源論－多細胞体制への道』中公新書、１９８３年、２１頁以下を参照

（１６）Ｃ．Ｇ．ユング（１９６１）『ユング自伝２－思いで・夢・思想－』林道義訳、紀伊國屋書店、１９７３年、２０２頁

（１７）Ｃ．Ｇ．ユング（１９２１）『タイプ論』河合隼雄、藤縄昭、出井淑子訳、みすず書房、１９８７年、２５８頁

（１８）Ｃ．Ｇ．ユング（１９３４）「集合的無意識の諸元型について」『元型論』林道

義訳、紀伊國屋書店、１９９９年、２７－７６頁
（１９）Ｃ．Ｇ．ユング（１９４１）「童児元型」『元型論』林道義訳、紀伊國屋書店、１９９９年、１７１－２０９頁
（２０）Ｃ．Ｇ．ユング（１９４６）「心の本質についての理論的考察」『元型論』林道義訳、紀伊國屋書店、１９９９年、２８９－３６７頁
（２１）Ａ．トインビー（１９７２）「文明の解体」『図説　歴史の研究』桑原武夫・樋口謹一・橋本峰雄・多田道太朗訳、学習研究社、１９７５年２５３－３０３頁
（２２）Ａ．アインシュタイン、（１９３６）「物理学と実在」『現代の科学Ⅱ』井上健訳、世界の名著、中央公論社、１９７０年、２５０－２５１頁
（２３）Bonner, J. T. (1988): The Evolution of Complexity by Means of Natural Selection. Princeton University Press. p.220-246
（２４）Bohr, N. (1932): Light and Life.　In Niels Bohr－A Centenary Volume.(Eds. A. P. French and P. J. Kennedy) Harvard University Press, p.311-319
（２５）Ｃ．Ｇ．ユング（１９２１）『タイプ論』河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳、みすず書房、１９８７年、２３９－２７９頁
（２６）Ｋ．ローレンツ（１９５０）「動物および人間の社会における全体と部分」『動物行動学Ⅱ』丘直道・日高敏隆訳、思索社、１９８９年、１３９－２３５頁
（２７）中岡保夫、大沢文夫、単細胞生物の環境への“慣れ”、神経研究の進歩、１９７８年、２２巻、９５１－９５８；大沢文夫、細胞の適応を探る、日経サイエン　　ス、１９９４年、5月号、２８－３３
（２８）特集　『新しい細胞像：膜と運動』（太田次郎編）日経サイエンス社、別冊サイエンス３０，１９８０年；本田久夫『シートからの身体づくりー生物が採用し　　た自己構築法』中公新書、１９９１年、２０４－２１２頁
（２９）Ｃ．ド・デューブ（１９８４）『細胞の世界を旅する（上）』八杉貞雄・大久保清一・八杉悦子訳、東京化学同人、１９９０年、５３－７８頁
（３０）Boyer, M. J. and Tannock, I. F. (1993): Lysosomes, lysosomal enzymes, and cancer.　Adv. Can. Res. 60, 269-291.
（３１）木村敏「対人恐怖における私的な「私」と公共的な「私」の交錯」『講座・生命』河合文化教育研究所、２０００年、２６４－２９３頁
（３２）Ｅ．ノイマン（１９７１）『意識の起源史（上）』紀伊國屋書店、１９８４年、３５－８０頁
（３３）Ｃ．Ｇ．ユング『個性化とマンダラ』林道義訳、みすず書房、１９９１年
（３４）Ｃ．Ｇ．ユング『心理学と錬金術Ⅰ』池田紘一・蒲田道夫訳、人文書院、１９　　７６年、１３８－１３９頁
（３５）Eigen, M. (1992): Steps Towards Life－A Perspective on Evolution.　Oxford University Press.

（３６）Ｈ．Ｒ．マトウラーナ、Ｆ．Ｊ．ヴァレラ（１９８０）『オートポイエーシス－生命システムとはなにか』河本英夫訳、国文社、１９９１年
（３７）多田富雄『免疫の意味論』青土社、１９９３年；大野乾『生命の誕生と進化』東京大学出版会、１９８８年
（３８）Kauffman, S.A. (1993): The Origins of Order－Self-organization and Selection in Evolution.　Oxford Unviersity Press.

補注

＊１：ここで、本稿で用いた「分裂病」の概念について述べておきたい。

まず、心理学の事例については、ユングの研究に負った。彼は、『ユング自伝１』（２０９頁）の中で、《今日のいわゆる神経症者の中には、他の時代なら神経症的になっていないような人がかなりある。もし彼らが、・・・自然とのつながりもまだもっているような時代と環境に生きていたら、自分自身との分裂を経験せずにすんだであろう》と述べている。彼は、長年の精神病者の治療から、人類を脅かす危険は自然からくるのではなく、人間個人やその集団のこころからくるという洞察を得たのである。

こうした「人間の問題」は、人間以前の動物社会にも、その起源が隠されているに違いない。実際に、ユングは『自然現象と心の構造』（２７頁）の中で、《動物の並はずれた方向感覚》が《空間と時間からの心の相対性を示している》と考えていた。また、精神病理学者の木村敏は、『心の病理を考える』（１７０－１７７頁）の中で、今西進化論を引き合いに出しながら、渡り鳥や魚の群れのような社会性動物に注目することの重要性を指摘している。

私にとって、こころの系統発生をその創造性と破壊性の両面性を意識しながら、遡って調べてみることは、ごく自然の発想であった。そこで、動物行動学に関しては、ローレンツの知見を参考にした。彼は、動物の本能が抑圧される、いわゆる家畜化された状態になると、外界に対する学習能力、あるいは創造性は、野生種に比べて格段に向上するものの、落ち着きのなさや破壊性が際だってくるという、「分裂病」の起源を捉える上で重要となる事実を報告している。そして、《現代人を破滅へと脅かす危険は、・・・外的世界ではなく人類である》（『動物行動学Ⅱ』２３４頁）というユングと同じ結論に至る。動物行動学において認められる創造性と破壊性の起源は、さまざまな生命現象においても見られる。これらの事例については、拙著『歴史としての生命』による他、細胞生物学者クリスチャン・ド・デューブの『細胞の世界を旅する』に基づいている。また、前述した「人間の問題」は、より高次の文明の歴史においても、その成長と解体に深く関係している。この点は、歴史学者アーノルド・トインビーの『図説　歴史の研究』に負うている。つまり、彼は、《崩壊の危険は、

成長する文明がたどらざるを得ないコースの性質そのものの中にあるがゆえに、つねに存在しかつ激烈である》（１９２頁）と述べている。さらに、《社会的分裂は、集団的経験であり、その意義は、解体する社会に所属する個人の魂の傷痕となる精神的な裂け目の外面的なしるし》（２８７頁）と述べている。まさに、ユング、ローレンツと同じ結論である。

　これらを総合すると、「分裂」という症状は、社会や学問、あるいは生命の世界ばかりでなく、《人間の自分に対する関係および世界に対する関係という日常的に繰り返される問題》（ユング『タイプ論』６０頁）と言える。私は、こうした視点に立って、「分裂病」を人間の精神病理に限定するのではなく、日常の生活体験の中で《対象を「理解する」ことができないという、いわゆる概念の統合障害の状態》をも含めて、広義の「分裂病」として捉えたい。私が「自己・非自己循環理論」を基に展開した広義の「分裂病」概念と、分裂病の「こころの病理」を専門に探ってきた木村敏の「分裂病論」との接点を見いだすことができれば、双方の理論の検証になると共に、「からだ」と「こころ」も相補的に捉え得る、より高次の理論へ向けた発展が望めるのではないだろうか。

＊２：ゴッテスマンは、『分裂病の起源』（２５７頁）の中で、研究者が分裂病を「理解できない」のは、研究者の「概念統合過程の欠陥」なのかも知れないと述べている。彼は、また分裂病を「精神のがん」（ⅱ頁）と呼んでいる。木村敏は『心の病理を考える』（２００－２０３頁）の中で、分裂病を「精神の自己免疫疾患」と呼んでいる。がんも自己免疫疾患も老化の兆候として現れることを考えると、「精神の老化」として「分裂病」を捉える本稿の立場も可能ではないだろうか。

＊３：本稿では、「加齢」は年齢を増すことの意味として使用している。それに対して、「老化」はがん、自己免疫疾患、アルツハイマー病といった「加齢」とともに発症率が高くなる病気の総称として使用している。

＊４：『広辞苑　第五版』（新村出編、岩波書店）によると、未開人とは未開社会に生きる人を指す。ここで、未開社会とは現存するまたは近い過去まで存在した、文明の外部にある社会のことである。３節でのべるように、「進化」に伴う逆相関関係が存在するために、見方を変えると文明人の方が「外部」にあるともいえる。従って、「未開人」と「文明人」の違いは相対的でしかなく、ユングの引用に合わせて用いているに過ぎない。

＊５：ユングは、『元型論』（１８９頁）の中で、「多数性から一者性」という言葉を用いて「個性化過程」を捉えている。つまり、『ユング自伝２』（１９４頁）に述べられているように、《秘密の集団というのは個性化に至る中間的な段階なのである。》同様の主張を、木村敏は《個体発生・系統発生の順序からいうと、複数一人称が先で、単数一人称が後》と述べている。

＊６：ローレンツの言う「気分伝染」は、《模倣ではないということを忘れてはならない》（『動物行動学Ｉ』３１４頁）。つまり、《彼らは、たとえ相互に顔を合わせなくても、ほぼ同じ時刻に採餌をし、水浴びをしあるいは就眠をしようとする》のである（３１６頁）。